

「もう一つの絶滅危惧種」

大学の社会人向け講座の講師をずっと担当しているが、今期は「マイフェバリットソングス&ラストソング」という少し風変わりな講座を開講している。7月で喜寿を迎える私が「とんがり帽子」（鐘の鳴る丘）以降愛唱してきた歌とそれにまつわるエピソードを思い出しながら、自分の生きた時代を振り返ってみようという狙いだ。2年前に「私の愛唱歌」というエッセイを書いたのがきっかけで、講座ならぬ高座にかける積りで構想を練っていた。昨年11月柿崎での講演依頼に「歌から学んだ私の生涯学習」と題し行ったところ、予想外に好評で再演申し込みが2件来たことに意を強くして社会人向けの講座に踏み切ったのだ。もの心ついて歌い出してから社会人になるまでを対象にした「エールで始

まった歌人生」、次いで「戦前から受け継いだ童謡・唱歌の意義」「抒情歌の系譜」「私が大事にしてきた戦争をしないための歌」の4回構成だ。愛唱歌と思われる歌を書きだしたら約300曲になった。その過程で20台前半の失恋の折、盛んに歌っていた三橋美智也の「石狩川悲歌」が突然思い浮かんできたり、石原裕次郎の「別離（ラズルカ）」と寅さんシリーズ16話で使われたきりだったが、渥美清を偲ぶ会で倍賞千恵子がアカペラで歌ったという「さくらのバラード」という2曲が新たに愛唱歌に加わったりした。

愛唱歌というのは、育った時代を色濃く反映する。10年違えば愛唱歌は大きく異なる。講座で取り上げる歌を案内に列挙したわけではないが、そのことを察知してか講座参加者の殆どは私と同じ70歳台だ。「歌は世につれ世は歌につれ」なのだ。一回90分の講義中に次々歌を取り上げ、それにまつわる思い出など話し歌っているのだが、同世代だから話はすぐ通じる。共通の愛唱歌を持っているということは同じ時代の空気を吸ってきたということだ。そんな中でも明治後半から大正・昭和の戦前に生まれ、戦後も歌い継がれてきた童謡・唱歌は、世代間をつなぐ共通の歌だと思っていた。「朧月夜」「故郷」「紅葉」などの唱歌、「赤い靴」「砂山」「この道」「早春賦」「かなりあ」などの文芸童謡、「里の秋」「みかんの花咲く丘」「ぞうさん」などの戦後生まれまで次々と思い浮かぶ。思い浮かぶままこちらも書き出したら158曲になった。そこでこのリストを周りの人たちに配って「題名を見て歌い出しが思い出されるものに丸をつけてください」とお願いしてみた。それをまとめてみて驚いた。年代が若くなるにつれて知っている曲数が階段を下るように減少してゆくのだ。我々にとって馴染みの「赤い靴」も「砂山」も「花嫁人形」も若者は聞いたことがないのだ。その最大の原因は童謡・唱歌を一

番覚える場である小中の音楽の教科書からどどん消えたからだ。もはや童謡・唱歌は絶滅危惧種なのだ。教科書から消えていった理由はいくつかある。「言葉が古くて今の子供にはわからない」「歌詞が不適切だ（「赤い靴」の“異人さんに連れられて”など）などが圧倒的だ。こうした動きは戦後しばらくしてからずっと続いているが、気がかりなのは代わりに教科書で取り上げられた新たな歌が歌い継がれているかということだ。勿論、「歌は世につれ」だから次々変わっていったって良いのかもしれないが、なんだか気持ち収まらない。正直「良い歌が沢山あるのに勿体ないなあ」と思っている。そしてふと思った。「童謡・唱歌はニーバの祈り（以前本欄で触れた）で言えば変革すべきか残すべきかどちらなのだろう」と・・・。

暫くそのことを考えていたら更に思いついた。「さんまや他にも沢山絶滅危惧種がある」と・・・。「電車の中

で文庫本を読む人」「元旦の朝、家族に年頭の訓示を垂れるお父さん」（一度やって見たかったなあ）「筆でラブレター」の返事をくれる女性」など・・・。そこでふとまた逆に絶滅種になって欲しいものもあるだろうと発想転換した途端、ドカッと浮かんできた。北朝鮮、非人道国家、核兵器、民族紛争、異常気候、原発の廃棄物、海洋プラスチックごみ、麻薬汚染、貧困による子供の人身売買・・・。幾らでもあることに怖くなった。

（令和3年6月）

